

Y3-31

整形外科病棟における暴言とセクハラ患者の実態 —急性期病棟からの報告—

前橋赤十字病院 看護部 三号病棟

○森村 榮子、小見山 千賀子、福田 富江

奥野は「院内暴力は座視しがたい問題である」¹⁾と述べている。2009年度当病棟では院内暴力が頻発しその対策に苦慮した。そこで、この一年間の院内暴力発生状況を、看護記録と看護師への聞き取り調査から、その内容をカテゴリー毎に分類し暴力の実態を分析したのでここに発表する。暴力患者は1年間で5名、男女比は5対0であった。平均年齢53.2歳である。配偶者の有無は無4名、有1名。職業は無職3名、派遣社員2名であった。平均在院日数は61.6日。突然の事故などによりベッド上安静が余儀なくされている患者が5名であった。暴力内容は暴言が4名、セクハラ3名、過剰要求2名、暴力行為1名(重複暴力あり)であった。以前の暴力有が3名である。全員複数回暴力を繰り返した。考察、暴力の発生の可能性が高い整形外科患者とは、突発的な受傷により長期に臥床安静を余儀なくされる男性、配偶者無、無職、年齢40歳代～60歳代で、以前にも暴力の経験があるという傾向が判明した。また、暴力内容は単発ではなく、重複して繰り返して発生していた。リンズリは「患者を知ろうとすることは重要である」²⁾と述べている通り、入院時に暴力に関するリスクをアセスメントすることが必要と考える。そこで、今回暴力発生要件を加味した、暴力リスクアセスメントシートを作成し、新人からベテランまで同一の基準で暴力の発生予想を立てることは、暴力を未然に防ぐ効果と、対策を早急に立案することが可能となり、看護計画に反映させることで暴力防止に役立つと考える。6月より病棟内で使用を開始し、その後スタッフの意識も高まり予測して患者と関わるようになってきている。また、過剰要求が増大している傾向があるので、今後の懸念材料であると考える。

Y3-33

技術演習を重視した人工呼吸器教育

福井赤十字病院 看護部

○橋本 真弓、福田 健一

近年の高度急性期医療においては、安全な医療機器の使用無しには成立しない状況にある。多くの部署で共通して使用されるME機器の代表のひとつは人工呼吸器である。人工呼吸器に関するインシデント&アクシデントは、患者に重篤な結果を招く場合が少なくない。その発生要因の大半は、人工呼吸器に関する知識不足と設定・操作ミスによるものである。事故防止の対策として、安全に取り扱うためのシステムの構築は必要だが、同時に最終行為者であるスタッフの人工呼吸器における基本的な知識や技術を統一すること、すなわち教育が重要となる。医療機器の安全な取り扱い、集合教育による講義形式だけで習得するのは困難であり、技術演習を十分に行い、実際に人工呼吸器の操作を行うことにより学習効果が高められると考える。本年度小グループによる技術演習を積極的に取り入れ、実際に呼吸器のアラームを作動させ、アラーム対処法等を実体験するシミュレーションの要素を組み込んだ人工呼吸器教育プログラムによる教育を予定している。技術演習を積極的に取り入れた教育方法に変更することにより、確実な知識や操作技術の習得ができるようになればと考え活動を始めた。その経過について報告する。

Y3-32

医療安全研修に全部門参加の5S活動を取り入れた効果

福島赤十字病院 医療安全推進室

○阿部 美幸

【はじめに】当院看護部では、平成16年度より5Sの手法を用いて職場環境改善に取り組み効果をあげている。この活動を院内全部門で実践し病院全体の環境改善を図ることを目的として、平成21年度の医療安全研修に取り入れた。「安全で快適な職場づくり～みんなで取り組む5S活動～」をテーマに院内25部署が活動に参加し発表会を開催することによって、5S活動に対する理解と意識の向上が図れたので報告する。

【方法】5Sに関する全職員対象研修(DVD研修)実施後、医療安全推進委員会にて全部門で5S活動に取り組むことを発表した。活動計画書作成(推進メンバー・取り組み箇所・取り組み動機・目標設定)、中間報告、発表原稿作成の時期を設定し、医療安全推進室にて進捗状況を管理した。中間報告後、院内をラウンドし進捗状況の確認と活動に関するアドバイスをを行った。発表会後にアンケート調査を実施し、5S活動に対する意識と効果について評価した。

【結果および考察】アンケートの結果、70%以上が「職場環境が整理整頓され働きやすくなった。」と回答している。また「院内の多くの職種が発表することにより病院全体で取り組んでいるという一体感があった。」「環境改善に対するみんなの意識が変わった。」という意見もあり、5S活動の効果は環境改善だけではなく、職場の一体感の醸成や安全な環境づくりに対する意識向上にもつながったと考えられる。今回の活動前に5Sに関する研修会を開催していたが、事前研修に参加したにもかかわらず「5Sを今回の活動で知った」と16名の職員が回答しており、参加形式の研修は有効であることを実感した。発表会後に優秀部署表彰を行うことによりモチベーションのアップにつなげた。職場の安全文化の醸成を図るため、今後も継続的に取り組んでいきたいと考える。

Y3-34

インフォームド・コンセント(IC)での立会人への期待 ～アンケートから～

徳島赤十字病院 医療情報課¹⁾、事務部長²⁾、内科³⁾、副院長⁴⁾

○丸関 陽子¹⁾、尾嶋 由美¹⁾、新居 三智子¹⁾、日浅 麻織¹⁾、西崎 艶子¹⁾、吉川 和彦¹⁾、服部 賢二²⁾、宮 恵子³⁾、神山 有史⁴⁾、日浅 芳一⁴⁾

【目的】医療において、十分なICと患者側の同意は不可欠である。当院では手術等のICに際して立会人を置くよう規定しているが、立会人の同席率は十分とはいえない。そこで、原因や問題点を明らかにするために、各診療科のICの現状を調査した。また、一般来院者にもICに関するアンケートを行い、医療者と一般市民のICに関する認識のずれを明らかにした。

【方法】2009年11月、手術を施行する医師72人に「予定手術における“手術説明と同意”に関するアンケート(11項目)」を行った。2010年4月に、病院祭に会場した一般市民150人に「治療を受けるうえでの“説明と同意”(8項目)」のアンケート調査を行った。

【成績】医師のアンケート回収率は62.5%であった。同意書は主に入院後に渡されていた。IC時の立会人は看護師、研修医、同僚医師の順に依頼していた。69.8%の医師が依頼先に困り、その理由の66.6%は「繁忙そう、出払って人がいない」など多忙を理由とするものであった。46.5%の医師が「立会人に居てほしいときがある」と回答した。一般来院者の93.8%は、IC時に病院職員の同席を希望し、その理由は「安心できる、心強い、一緒に聞いてほしい」であった。

【結論】医師側はICの証人として立会人の同席を切望し、患者側は安心のために病院職員の立会を希望していた。近年は、紹介患者と救急患者主体の診療になり、医療側と患者側の信頼関係を築くための十分な時間が得難い。今回の結果を全職員で共有、検討し、立会人の同席率向上の改善策を検討したい。